

付いたものを二三拾つてみても、千葉県の富崎村の人口密度は  $1\text{km}^2$  について 3,900 を越えているし、愛知県の日間賀島村、福岡県の簗島村、大分県の保戸島村、香川県の伊吹村、鳥取県の網代村等、人口密度は3,000から3,900 の間にある。そしてこれ等の村の就業人口中、漁業水産業および同養殖業に従事する人口は実に 50%から 80%に上つている。また、漁業水産業人口の割合が70%に達する愛知県の簗島町の人口密度は  $1\text{km}^2$ につき 5,000 になんなんとし、就業人口の半分が漁業水産業に従事する神奈川県の福浦村の人口密度は実に  $1\text{km}^2$ につき 5,700 を越えている。

漁業や水産業が高い人口密度を支えていたような集落にとつて、資本的大規模漁業の進出による漁場の喪失はたちまち“人口学的高血圧”状態を異常に興進せしめ、一度、人口流出口、いな、突破口が開かれるにおいては減退人口に転換することが少くない。しかも、その人口減退速度は頭初非常に著しい。こうした事情は孤立的な島の人口について特に著しく現われる。ここ掲げた2つの集落の特殊の人口増加形態は、まだ分析が十分でないにもかかわらず、こうした事情を物語るには十分であるとみられる。

この研究に際しては大阪市立医科大学篠崎吉郎理学士の指教によるところが少くない。また、東京大学泉崎一助教授は沖家室集落に関する資料を提供して下さいました。本研究所企画科長上田正夫文学士は研究上絶えず協力をおしまれなかつた。作業と作図については、本研究所企画科山口喜一技官および高安弘氏を煩わしたところが少くない。記してこれ等の友人の協力に深く感謝の意を表する次第である。

### “Urbiculture”

目下滞米中の本研究所黒田俊夫技官が送つてくれたアメリカ週刊誌 “This Week” の去る8月5日号で、またしても、“Urbiculture” という新造語がおめみえした。カリフォルニア選出の J. Arthur Younger 国会議員の気焔である。“Agriculture” が農村と農民に関するものであることに対して、“Urbiculture” とは都市および都会人に対する care を指すということである。都会人といとこどうしの農民は農務省のいろいろの care やサーヴィスをうけている。それなのに、都会人は全く忘れられたまま子であつて何等国の特別の care をうけていない。今日の都市は山なす問題をもつている。彼は1例として “smog” の問題をあげている。——“smog” という語も恐らくアメリカ 20世紀の造語だろう。調べたわけではないが、アメリカの都会の smog の実物をみると “smoke” と “fog” とをかきまぜた感じで実感をよく表現した新造語である。——とにかく、ここでは煤煙としておこらう。彼の数字によるとアメリカの都市に降る煤煙の量は年 50,000,000 トンに上るのであつて、都会人の保健上ゆゆしき問題である。都市の煤煙のために洗濯代がかさむ、住宅のペンキの塗りかえをやらねばならぬ、ビルディングのお化粧なおしが必要となる、街燈を明るくしなければならぬ、等等。こうして、煤煙が都会人のガマ口から毎年何と15億ドルをまき上げているのである。これはほんの1例であるが、今日の都市は、最早、都市だけでは手に負えない無数の問題をもつているのである。だから、農務省に対してアービカルチュア省を作ることがどうしても必要である。この省の仕事は枚挙にいとまがないが、都市の煤煙やジニアイの処理、スラムの改善、危機にひんしている地方交通組織の改善、地方道路網の拡張整備、都市におけるヘリコプター交通の発達促進、少年犯罪の防止、画期的な都市計画、都市改造の技術動員等等。

ちなみに、米国大使館文化交換局出版課：アメリカーナ、第2巻第10号、1956年10月号に『都市空気汚染の諸問題』と題する François N. Frenkiel (春日明訳) の好箇の研究が出ている。(館 稔)